公孫樹

東京都立
豊多摩高等学校
令和4年７月
第 58 号
東京都杉並区
成田西２－６－18
℡03(3393)1331

「ＶＵＣＡの時代への対応　～学びの継続～」

学校長　栃倉　和則

今年は観測史上最も早い梅雨明けで、突然の猛暑に予備電力が５％を切ったなどと、聞いたことのない言葉に驚いた。コロナは未だ収束せず、新規感染者数はまたも増加傾向にある。地球温暖化、異常気象、災害、ＡＩの急激な進化、グローバル化、複雑化する世界情勢……予測がしにくい時代になったと言われて久しい。

予測困難な状況をＶＵＣＡの時代（Volatility:変動性・Uncertainty:不確実性・Complexity:複雑性・Ambiguity:曖昧性の頭文字を取った造語）と言うらしい。ＶＵＣＡの時代は、様々な制度や社会の仕組みのみならず、人の生き方や価値観にまで影を落としている。この三年間、先の見えない不安と行き詰まりを痛感し、様々な課題をすべて実現させることができない無力さを嘆きながらも、前に進むことだけはいつも心に留めていたいと念じている。

今年の一年生（77期生）から新しい教育課程が実施されている。火曜日の７時間目が増えたこともそうだが、高等学校の通知表にも「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体的に学習に取り組む態度」といった観点別評価が導入された。まさしく新学習指導要領の意図するところである。時代の変化とともに求められる学力観も変わっている。しかし、この地球上に私たちが存在し、いかに困難な時代にあっても、それを乗り越えていかなければならないという宿命に変わりはない。

主体的に関わって、課題を発見し、問題の解決策を講じ、実行できる能力が必要なのは、昔も今も変わらない。知識偏重主義に陥ってはならないことは何よりも重要だが、「思考・判断・表現」が、「知識」に裏付けられていることに疑問の余地はない。知識のない思考や判断は、ただ脈絡のない思い付きになりがちだからだ。ＶＵＣＡの時代にあって必要なことは、常に学ぶ、そしていつまでも学ぶということにほかならないのではないだろうか。夏は絶好のチャンスだ。

Touch the Sky! TOYOTAMA!

「季節外れの星座のはなし」

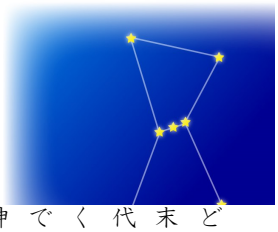
副校長　昆野　弘幸

豊多摩高校の合唱コンクールを初めて拝聴しました。学友の皆さんの真剣な姿と団結力、本当に素晴らしかったです。コロナ禍のもと、本番に向けて限られた時間のなかで練習していくうちに、合唱する仲間同士の気持ちが次第にひとつになっていくことを実感できたのではないでしょうか。その成果がどのクラスの合唱にも表れていたように思います。

皆さんの合唱を聴きながら、ふと、あることが脳裏に浮かびました。それは、かつて私が学級担任をしていたときに発行していた学級通信の「すばる」というタイトルのことなのです。

若かりし頃、初めて高校の学級担任になった際、何か自分に課題を課したいと考え、学級通信を発行してメッセージを生徒や保護者に伝えよう、それも毎週一回必ず発行しようと決めました。ホームルームや保護者会では「週刊で通信を出します」と宣言までしました。不定期発行にすると、やがて何かと理由をつけて発行しなくなると思ったからです。文章を書くのが得意ではない私にとって「毎週発行宣言」は奏功し、以後、一時期を除き担任をしている間はずっと発行し続けることができました。

小学生のとき、夜空にオリオン座を見つけて感動して以来、私は天体に興味をもつようになりました。ベストセラー『宙の名前』の著者で知られる林完次先生が講師を務める地域の某「星の会」に数年間参加していたこともあります。



初めて学級通信を発行するときに、どのようなタイトルにするか悩んだ末、「すばる」と名付けました。冬の代表的な星座のおうし座の肩先に輝く星団がプレアデス星団です。肉眼でも見ることができる淡く明滅する神秘的な星団です。この星団、我が

国でも古くから親しまれ、「すばる」と呼ばれていました。星の群れを糸でつないだ玉飾りと見たて、「統ばる星」と意味付けられたともいわれています。自分のクラスの生徒たちが、助け合い、協力して一本の糸でつながり、そして美しく輝いてくれたらいいなと考えて学級通信のタイトルを命名したのです。このたびの合唱を聴きながら思い出したことでした。

今は夏、オリオン座とかおうし座とか、ちょっと季節外れの話をしてしまいました……。

「合唱コンクールが終わりました」

生徒指導部　山田　和利

６月17日(金)に合唱コンクールが行われました。前回（２０１９年）実施した合唱コンクールより３年ぶりの実施であり、１年生から３年生までの学友のうち誰も経験したことのない学校行事の実施でした。保護者の方が参加された行事としても久しぶりのものとなりました。

このコンクール実施に際して、生徒保健部の行事担当として過去の資料から分かった本校合唱コンクールの進め方を踏襲しながら、東京都教育委員会から出されている「コロナ禍における学校行事実施の指針」に沿ったかたちで、かつコンクール会場の定めた厳しい会場使用規定をクリアしなければ実施できないという状況の中で実施計画をたてることになりました。今年度は時間のない中で後者の制約をかなり受けた、こちら側に選択や決定の余地がほとんどない実施計画となってしまったように思います。こうした状況の中で、「マスクをしたままでの練習と本番の実施」、「換気の確保ができる教室での、一方向を向いた密にならない練習」、「食事の場所を会場内外で確保できないため、午前・午後の二部制での開催」、「ステージ寄りの前方の席を数列空け、すべての学友はとなりの座席を空けて座る」、「健康観察表を持参し、会場のサーモ通過とあわせたダブルチェックを受ける」、「使用した扉や座席をウエットティッシュですべて拭く」など、学友の皆さんへ様々な制約を課すことになりました。このような制約を課すことが今年度では実施可能となるためのギリギリの条件で、学友の皆さんには練習や本番の場面で「何でこんなことまでしなければならないのだろう」という煩わしい思いをさせてしまったのではと思います。しかしながら、学友の皆さんはこうした制約を乗り越えて、まったく白紙の状態から、それぞれの立場で練習や本番に向けてどのように進めてよいか試行錯誤しながら、自分達のできることを精一杯行い、合唱コンクールを成功に導いてくれました。特に学年リハーサルから本番までの一週間の変貌は、「さすが豊多摩生。底力あるなあ。」と感心させられました。

合唱コンクールは、クラスの中で様々な役割が与えられ、与えられた役割のもと、クラス全員の協力が必要な学校行事です。普段の学校生活ではなかなか見られない、うまくいかない場面が連続して現れ、こうした状況をみんなでどう克服していくかを考え、苦しみ、一つ一つ越えていく中で、普段見ることのできない新たな学友達の姿を発見し、学友同士の距離をこれまで以上に縮めることができます。こうした伝統ある行事を来年度以降も続け、大切に育ててもらいたいと思います。継続することの大事さは、途切れたときに痛切に感じるものです。一度途切れてしまったこの行事をどれだけ成長させていくかは、来年度以降の学友の行動にかかっています。また、これから行われる学校行事に対しても、合唱コンクール同様に学校全体で立ち向かい、困難を一つ一つ克服して成功させてほしいと思います。次は「記念祭」です。

異動　教科順・敬称略

※《転出入》の教員の個人名をカットさせていただきました。